

■□要旨■□

1. 松田講師の教え「三項目」

- ①企業は社長で決まるといいますが、それだけではなく、会社はミドルの力を引き出してこそ強くなる。
- ②サラリーマン生活、とにかく能動的にチャレンジすることと、自分で決めた目標に向けて何をすべきかを考えることが重要だ。
- ③やりたい仕事を実現するためには出世によって獲得する地位と権限が必要。ただし、出世が手段なのか目的なのか、見誤ってはいけない。

2. 日本興業銀行時代

松田講師はミドルの時期を、日本興業銀行で過ごした。90年代に長期信用銀行の破たんが相次いだことに危機感を抱き、進退をかけて野村證券との業務提携に奔走。部門の垣根や上司をも飛び越して頭取に意見具申した。ルールの逸脱などに一定のデメリットはあったが、課長クラスでも会社が動かせることを実感した。

3. みずほHD時代

大合併下のみずほHDでは、コーポレート銀行での執行役員兼支店営業部長、証券での副社長を歴任。当初は「言葉が通じない」などの困難を伴うものであったが、部長や課長に如何に頑張ってもらうか等に注力し、本当に面白い時期を過ごしたという。組織の力を最大化するために、ミドルのしやすい職場をつくることや、自分でボールをけらないことに気を配った。

4. ユニゾン・キャピタル時代

会社の看板なしで仕事してみたいと、ファンドの共同パートナーに転身。様々な企業の再建に関わっていく中での気づきとして、①その会社内部にしかない会社立て直しの秘訣を引き出すこと、②その秘訣はミドルが答えを持っていることが多く、そのミドルを育て活性化させること、③次世代リーダーが育つチーム型組織を組成すること、が重要だと挙げた。

5. 大企業とベンチャー企業の面白さの違い

大企業の面白さは、組織運営・チームでの達成感・監督稼業など、マネジメントの面白さにある。ベンチャー企業の面白さは、起業家精神の発揮や全責任・全権限を負うこと等、事業者としての面白さにある。

■□今回の学び ひとことという■□

課長の役割は「監督兼エースピッチャー兼4番バッター兼二軍監督」なので、課長はその業務について一番詳しくならなければならないとともに、部下の育成にも注力して、組織力の最大化に取り組まねばならない。

質疑応答における「あれこれ自分でやりたくなる」に対して「領域が広がっていくにしたがって、いずれ、自身だけではやっていけなくなる！」という示唆、また、「どちらにしても逃げられないから絶対に逃げるな！」という教えは、すべての課長の行動指針として、とても明快です。



■□感想■□ ソフトで冷静な語り口と大胆な行動のギャップが、松田先生の魅力でもあり凄味でもあると思いました。その松田先生の歩んだ道のりや考え方は、自分の直面している課題や選択肢に対して、貴重な道しるべだと感じました。今後、先生が仰る「監督兼エースピッチャー兼4番バッター兼二軍監督」を目指して行動してまいります。